



TITLE:

講演

AUTHOR(S):

CITATION:

講演. 人文 2007, 54: 13-21

ISSUE DATE:

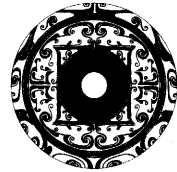
2007-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/50625>

RIGHT:

講演



夏期公開講座

「名作再読」

読書する女

——メタ文学としての『ボヴァリー夫人』

大 浦 康 介

「名作再読」と銘打った二〇〇六年度の夏期講座で、私はギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』を取り上げた。奇しくもこの年は『ボヴァリー夫人』の初出（『パリ評論』一八五六年）から数えて一五〇

年目にあたる。この作品の名作たるゆえんは何か。またこの作品はいかなる意味で西洋文学のモダンテイを先鋭的に体现しているか。私はこれらの問いを導きの糸として、（１）『ボヴァリー夫人』の作品世界、（２）ヒロインの人物造型、（３）作品のメタ文学的二重構造という観点から分析を試みた。

（１）にかんして特筆すべきは、副次的人物（オメル、ルウル、ジュスタン、盲人の物乞い）の活用と、ある種の映画的技法を先取りするかのようなステレオタイプオニツク、ポリフォニツクな語りの技法（ルドルフが共進会でエンマを誘惑するシーンなど）である。これらをつうじてフロベールは、細部にまで神経のゆきとどいた、立体的、力動的な（動く建築物ともいふべき）作品世界を構築している。このことは、しばしばその「客観性」が強調されるフロベールの作品世界はじつはきわめて周到に演出された「人為的」世界だということでもある。

（２）フロベールの人物造型は往々にして典型（アーキタイプ）の創出へと向かう。その最たる例がヒロイン、エンマ・ボヴァリーの造型である。これは周知のように「ボヴァリスム」という一種の流行語を生んだ。名付け親ともいふべきジュール・ド・ゴルチエはこれを「自分のことを自分とはちがう誰かとして考える能

力」と定義している。後世の論者はこの概念をいたずらに普遍化することでそこに内包される「女性性」を削ぎ落とした観があるが、エンマの人物造型は「読書する女」の表象伝統（とくに絵画における）と分かちがたく結びついている。

(3)『ボヴァリー夫人』はなるほど「幼い頃から小説に親しみ、いつも夢みがちで、現実を直視できず、それがもとで身の破滅をまねく女性」についての小説である。つまりは小説を読む女についての小説、（想像力を基本にみる）文学についての文学である。フロベールは『ボヴァリー夫人』によって、自己反省的な文学というすぐれて近代的な課題を引き受けるとともに、そこに（不幸な）女性の表象を重ね合わせることで独自のアイロニーを実践したのだといえるだろう。

『坊っちゃん』と『風の又三郎』

——貴種流離譚としての読み比べ

高橋 世織

宮沢賢治は文壇とほとんど没交渉であったために生前は未発表の作品が多く、ある意味で純粹に書く行為ができました。漱石も当初は英文学者、東大の教師でしたが、書くことに没頭できる道を選び四〇歳で転職、亡くなるまでの一〇年間、新聞メディア（東京朝日新聞）に小説を連載し続けました。この二人には意外なほど共通項が多いのです。

①共に英国病、英国趣味、②短い間の教師体験、③アマチュアリズムを尊重④宗教観（禅宗、法華経）⑤反自然主義の文学観、⑥死のテーマ、死の体験（子規トシ）⑦未完成（明暗、銀河鉄道の夜）⑧サイエンス・リテラシー、⑨旺盛なメディア意識

世代的には、賢治は漱石チルドレンに当たります。

『坊っちゃん』も『風の又三郎』も学園小説、学園モノの走りです。前者は教師、後者は学童の視点から学校空間とそれを取り巻く社会や自然を、外部からの闖

入者の視点でもって語られています。その闖入者は、異文化を身に纏っているため、閉塞した共同体に波風を与え風穴を開けて、やがてまた立ち去ってしまいます。この闖入者こそ、物語の主人公なのです。

物語理論で主人公の定義を、例えば「プロトマン」という人は、トポロジ的に越境行為をする人物と規定しました。柳田國男は〈流され王〉、折口信夫は〈貴種流離譚〉という枠組みで考察しました。この二人は民俗学者ですが、ほぼ同時期にそれを考え付いたのです。この三人の考え方は、概ね共通していて、現実界Aから異世界Bに主人公は入り、やがてその異界を離脱して、元の現実界Aに戻ってくる、という構造を物語りは基本的にとるというのです。ここで、大事なのは、主人公の越境行為によって現実界AがA'に変わる、変えて見せるということです。『風の又三郎』の場合は、村童たちの居るところへ闖入者Ⅱ又三郎がやってくるので、「桃太郎」や「浦島太郎」のように〈異界滞留譚〉という言い方になるかもしれませんが。では、なぜこうした、現実を異化してみせる物語の構造が出来上がったのでしょうか。我々には現実世界というものをなかなか見極める事が容易ではありません。標準レンズ的な正面鏡に映し出すよりも、三叉路にある凸面鏡のような歪みをもった鏡に映し出した方

が、現実の特徴がより強調されて本質が見えてくるのです。物語りの〈語り〉は、本来なら〈騙り〉と記した方が正しいでしょう。つまり、〈騙す〉ということなのです。言語構造の世界に歪みを持たせることで、現実というものの本質を教え、気づかせ伝えるのが物語りという言説装置の一つの大きな役割、機能なのです。

さて、この二つの名作に共通する魅力の最たるものは、〈声〉やざわめきの魅力がたっぷり語られ、描かれている点でしょう。『坊っちゃん』九章の〈胸間声〉など、謡や落語に精通した漱石ならではのくだけた『風の又三郎』に關しましては、〈風言語のミュージカル〉として、一種の風の精霊による歌物語として読むことも可能なのです（拙稿参照『近代日本文学のすずめ』岩波文庫別冊13）。

『論語』のなかの物語

金 文 京

孔子は、言うまでもなく中国を代表する思想家、偉人である。その孔子の生涯を知るためにもっとも重要な資料は、これまた言うまでもなく、その言行を記録した書物、『論語』である。ただし『論語』は年代を追って編集されていないため、個々の言行がいつ、どこでのものなのかを知ることができない場合がほとんどである。たとえば冒頭の、「子曰く、^{よろこば}学びて時に習う、また説しからずや」に始まる一節も、どのような状況での発言なのか明らかでない。むしろそんなことは分からなくとも、我々は孔子のこの言葉を一般的教訓として味わうことができる。しかし中には、背景が不明であるため、なんのことも分からない場合もな^くはない。

たとえば、「子謂く、公治長は妻すべきなり。^{めあわ}縗^{るいせつ}（牢屋）の中にあるといえども、その罪に非ざるなり。その子をもつてこれに妻す」（公治長篇）、つまり孔子

の弟子の公治長が牢屋に入っていたが、孔子は濡れ衣だと言って、自分の婿にしたものであるが、公治長はなぜ牢屋に入れられたのか、また孔子はどうして彼が無罪であると知ったのか、これだけではなににも分らない。しかも歴代の『論語』の注釈は山ほどあるが、この疑問にはまったく答えてくれないのである。

唯一の例外は、六世紀の人、梁の皇侃の『論語集解義疏』で、そこでは、公治長は鳥の言葉が分かるという特殊な才能があつたため、ある殺人事件に巻き込まれ逮捕されたが、後に鳥の言葉が分かるということが証明されたので釈放されたという話を載せている。この荒唐無稽な話は、むしろ事実とは思えないが、とにかく『論語』の右の条の説明にはなっているであろう。

『論語集解義疏』は中国では早くになくなってしまったが、日本に伝わった本が十八世紀に中国に逆輸入されたことで有名である。ただし公治長が鳥の言葉を解すという話は、内容を少し変えながらも、その後、明代の類書や最近の民話にまで伝わっている。また日本でもさまざまな記録があり、もっとも新しいものは、明治の思想家、幸徳秋水の「鳥語伝（公治長物語）」（『萬朝報』明治三十五年十一月一日の社説）がこの話を扱っている。

鳥の言葉を解すという話は世界中の民話、伝説にみ

られるが、『論語』の記述が簡略すぎるため、だれかが民話を利用して、こんな奇想天外な話をでっち上げたのであろう。同じような例としては、「後生畏るべし」（子罕篇）について、孔子が項託という子供と問答をして言い負かされたという話を記す、敦煌発見の「孔子項託相問書」がある。

『論語』は一般に教訓書として読まれているが、中には右の例のようによく分からないことも書いてある。そこから自分なりの物語を想像しながら読んでみるのも一興であろう。

開所記念講演

公債・年金・いのち

坂 本 優一郎

一八世紀イギリスでは、各地で「公共的プロジェクト」が数多く推進された。その大部分は、運河の掘削、ターンパイク（有料道路）の建設、道路の舗装、橋梁の敷設、街灯の設置、公園の整備、ドックや埠頭などの港湾設備の造成といった、社会的インフラストラクチャにかかわるものであった。各事業の主体となったのは、議会制定法によって授權され、組織化された「トラスト」である。

それぞれの事業では莫大な費用が必要とされた。しかし、当時の政府歳出の大部分は対仏戦争の公債の利払いと償還費に充てられており、中央政府による「公共的プロジェクト」へ財政的支援はほとんどなかった。

そのため、トラストの多くでは、事業ごとに「公」債が起債され、地方税や各事業の収益が利払いに充当された。これらに投資したのは、中央政府の積極財政によって生み出された、公債などの証券を資産として活用する人びとであった。

つまり、18世紀のイギリスでは、中央でも地方でも、「公」的な事業—対仏戦争であれ、地方インフラ整備であれ—の「証券化」がおこなわれたのだ。リスクを分散化し、証券投資に関心をもつ人びとからなる「投資社会」に働きかけ、その「遊休資金」を流動化することから、各事業の原資が獲得されたといえる。こうしてイギリスは、「投資社会」の勃興と拡大によって、大西洋帝国から国内のローカルな社会にいたる空間群の整備・構築に成功した。これらの空間群こそが、商業・製造業の飛躍的発展の前提条件となったのである。

ここで重要なのは、証券化が「年金 annuity」というかたちをとったことだ。証券の多くは、「トンチン公債」のように、名義人が生存しているかぎり利払いが継続されるという、事実上の「終身年金」としての性格を帯びていた。そのため、一八世紀のイギリスでは、「いのち」という時間が投資という視点から意識されていく。とはいえ、「いのち」なる時間はもつとも予測しがたい時間でもあった。そこで「投資社会」

の成長に並行して、「いのち」を神の領域からとりだし、客観的に予測しようとする動きが出てくる。当時、飛躍的な発展を遂げつつあった確率研究や、社会的・政治的問題となっていた人口推計の試みとリンクしながら、平均余命が地域・性別・年齢ごとに推計される。これが「年金」を求める証券投資の科学的な合理化—予測可能性の獲得—の背景となっていたのだ。

講演では、ロンドン近郊のミドルセクス州における監獄建設を、事業の具体例として取り上げた。個人の「いのち」という時間が具体的な空間として可視化され、また、空間を構築するプロジェクトが証券化によって「いのち」なる時間に姿を変えていく。こうした空間の構築と「いのち」という時間との相互関係をとらえるには、「投資社会」の勃興という視点が不可欠なのである。

ゲノム時代の人間

——個の差異と社会における連帯の間ではざま

加藤 和人

人間の遺伝情報の全体である「ヒトゲノム」を解読する「ヒトゲノムプロジェクト」が、一九九〇年代から二一世紀の初めにかけて行われていたことを覚えている人は、どのくらいいるだろうか。そう言えばそんな話があったな、という人もいれば、そもそもよく知らないという人もいるだろう。

いずれにしても、「ヒトゲノム」は過去のものとなった感がある。

研究の現場では、実はこうしたイメージとはまったく反対に、ヒトのゲノムを調べる研究が活発に進められている。二〇〇四年に終了した「ヒトゲノムプロジェクト」では、ヒトのゲノムについての基礎的な情報を得るために、少数の匿名ボランティアの試料を解析し、全塩基配列を解読した。これに対し現在は、それよりもはるかに多数の何万人、何十万人の人からDNAを提供してもらい、個人の違いを調べる研究が進め

られている。

例えば、イギリスでは五〇万人の国民から試料を集めることを目指す「UKバイオバンク」というプロジェクトが始まっており、日本でも三〇万人を目標にした事業が二〇〇三年から始まっている。それらの目的は、多数の人のゲノム解析の結果と病気の発症などの情報を組み合わせて、病気のなり易さや薬の利きやすさなどの違いのもとになるゲノム上の違い（つまりそれを構成する遺伝子の違い）を見つけることである。こうした分野の研究成果をもとに、東大病院などでは、薬の処方 personalize 個人ごとに変えるシステムが試行的に動き始めている。

当然のことながら、ゲノムの違いは個人の違いのすべてではない。特に健康状態に関しては、生活習慣などの環境要因の役割は大きい。だが、ヒトゲノムの個人差が詳しく解明される時代になるにつれ、個人の違いを前提にした社会のシステム作りが必要とされる場面が増える可能性がある。遺伝子の違いが原因で、日本人の五割はお酒に強く、四割は弱く、一割はまったく飲めない。その事実を明確に意識した際に、どのように社会が変わるだろうか。

また、多数の人の研究協力が必要になるにつれて、研究への参加を単なる自己決定だけにゆだねるのでは

なく、「社会における連帯」という意識を持つて理解しよう、という意見も出されている。個人のゲノムは家族・血縁者のゲノムと共通性がある。自分が研究に協力すれば、それらの人々が恩恵を受ける。そうした事実をもとに「連帯」という概念が持ち出された。それに対し、「連帯」を理由に個人の自由な行動に介入するのは問題であるという議論が出ているのは当然のことだろう。

ヒトゲノムの理解は、単なる医学・医療の問題を超え、個人の差異の意味や社会における個人のあり方といった、より大きな問題に広い視野から取り組むことを要求している。

望楼、楼閣から高塔へ

——中国仏塔の成立——

田 中 淡

日本や朝鮮ではほとんど唯一の類型である三重塔・五重塔など多層塔の形式は、古代中国における数種の仏塔類型のうちの一形式の模倣であつて、さらにその原型はインドのストゥーパの構成要素の一部を採用した結果であることもすでに定説となっている。ただ、中国仏塔の最初期における成立の背景には、必ずしも仏教寺院に限らない中国建築特有の歴史と伝統が反映していることも事実である。

中国における仏寺の造営として文献上確実に知られる最古の事例は、後漢時代末に笮融が徐州に建てた浮図祠で、金色の銅像を祀り「九重の銅槃を垂らし、重楼閣道（重層の楼閣・回廊）に作り、三千人を収容できた」（『呉志』劉繇伝）と伝える。後世の仏塔の相輪に相当する部分を屋頂に戴き、殿内には本尊を祀る楼閣建築で、後世の仏寺における仏殿と仏塔の機能を併せもつ建築であつた。その外観も内部も、ストゥーパ

は注意すべきであろう。

の傘蓋をシンボル化して屋根に用いている点を除けば、主体構造は中国固有の木造樓閣を採用しており、中国仏塔は最初期からすでにしてインドの原型からは遠く隔たるものであった。この初期仏塔の成立の背景には、前漢武帝が建章宮に建てた神明台・井幹樓を契機とする樓閣建築の流行があった。後漢以降に出土遺物が急増する高塔形式の明器陶樓をみても、当時は中国建築史の大きな転換点であったことは疑いない。

一方、古代中国の「樓」には両義あり、一般的な重層建物 of 意のほか、銃眼のように窓孔をぽつぽつと開けた重厚な望樓あるいは角樓を表すとする字書がある（『爾雅』、『釈名』）。後世の実例でいえば北京城の外城徳勝門箭樓、内城東南角樓の類である。『考工記』、『墨子』や馬王堆三号墓出土の帛書の記載や地形図の描写などからみても、防御性の重層城樓こそ古来の樓の原型であったことは推測に難くない。

中国の初期仏塔が成立する時期は、古代高層建築の主流が、台榭から樓閣へ、土木混造から木造へと移行する転換期とちょうど重なり合っている。ストウパーの細部を換骨奪胎した外觀の特徴だけでなく、後世にいたるまで自律的で、排他的とさえいえる特質を頑なに守り続けた中国建築の伝統が、主体構造の変遷を通してみても、初期の段階から明確にみとめられる事実